

- ⑪ 斎藤奈穂子 (2002) 「蜻蛉日記下巻における漢文的表現——兼家との関係の相対化へ」『国文学研究』137: pp. 33-43. 杉本一樹 (1981) 「栄花物語正篇の構造について」山中裕編『平安時代の歴史と文学・歴史編』に所収, pp. 309-330.
- ⑫ この441例のほか、『今昔』説話題目に用いられる「スナハチ」は1例見られるが、本稿では、対象外とした。『今昔』の「スナハチ」の用例を調査した際、有賀嘉寿子 (1982) 『今昔物語集自立語索引』笠間書院を利用した。
- ⑬ 例28の出典に「僧愁懇求_レ出。俄而至_レ廟。又與_レ神同坐。因問欲_レ救_レ同_レ学_レ。有_レ得_レ理耶。神曰。可_レ得_レ耳。能爲寫_レ法華經_レ者。便免。(冥報記・卷中・第一話)」とある。
- ⑭ SAT 大正新脩大藏經テキストデータベースでの調査した結果、「然即」の用例は計737例見られる。

参考文献

- 山田孝雄 (1930) 『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』宝文館：p. 174
 正宗敦夫編 (1954～1955) 『類聚名義抄』風間書房：p. 102
 山田孝雄 (1954) 『平家物語の語法 下』宝文館：p. 1419
 築島裕 (1965) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会：p. 644
 長澤規矩也編、田中篤実ほか校訂 (1972～1974) 『史記』古典研究会
 中田祝夫編 (1977) 『倭点法華経』勉誠社：p. 359
 原田芳起 (1977) 『宇津保物語研究 考説編』風間書房
 山中裕編 (1981) 『平安時代の歴史と文学・歴史編』吉川弘文館
 西瀬間正之編 (1993) 『古事記音訓索引』おうふう
 山口康子 (1998) 「『今昔物語集』の『即』：主として文体印象とのかかわりについて」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』56: pp. 17-31。
 山崎貞子 (2007) 「古代語の副詞『すなはち』の考察—『即』との比較から」『横浜国大語研研究』10: pp. 15-29
 築島裕編 (2007～2009) 『訓点語彙集成』汲古書院：pp. 434-435

〔付記〕 本稿は2019年度同志社大学国文学会研究発表会 (2019年6月30日) における口頭発表に基づき、加筆修正したものです。多くの貴重なご意見を賜りました方々に、心より御礼申し上げます。

和漢混交文では、即時発生の用法は『今昔』の天竺震旦部のみ用いられている。原因条件の用法は仏典の影響を受け、『今昔』で即時発生の用法より多く使用され、和漢混交文に定着したことが推測される。

和文体では、「スナハチ」の副詞総用例数・接続詞総用例数の比率は78.5%・21.5%であるが、和漢混交文では、65.3%・34.7%である。時代が下ると、「スナハチ」の副詞用法が衰退する傾向が見られる。

注

- ① 「スナハチ」に名詞用法、副詞用法、接続詞用法がある。『日本国語大辞典（第二版）』によれば、名詞用法の「スナハチ」はある時点を表す。副詞用法の「スナハチ」は時間量の短さを表すものである。接続詞用法の「スナハチ」は換言の働きをし「つまり」の意をするものと、文中にあり仮定を表す已然形を前接し「それなら」の意を表すもの、文頭にあり因果関係を表し「それゆえ」の意をするものに分けられる。
- ② 仏典の「即」の用例調査はSAT 大正新脩大藏経テキストデータベース2018版（SAT2018）を利用した。
- ③ 「即」の用例の返り点について、仏典は筆者の付けたもので、漢籍は和刻本正史『史記』によったものである。用例引用時、旧漢字を新漢字に統一した。
- ④ 中田（1977）『倭点法華経』では、この例の「以……故」を全体として扱っている。
得_レ見_レ我身_一、甚大歡喜、転復精進、以_レ見_レ我故、即得_三三昧及陀羅尼_一。
- ⑤ 漢籍から「即」の用例調査の際には、以下の資料・データベースを利用した。
台湾中央研究院漢籍電子文獻『史記』、藏中進編（1979）『遊仙窟 本文と索引 江戸初期無刊記本』和泉書院、劉殿爵・陳方正編（1992）『淮南子逐字索引』商務印書館、劉殿爵・陳方正編（1992）『說苑逐字索引』商務印書館、劉殿爵・陳方正編（1992）『礼記逐字索引』商務印書館、何志華・劉殿爵・陳方正編（1992）『春秋左伝説逐字索引 上』商務印書館
- ⑥ 用例を調査した際、『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』『大鏡』は『日本語歴史コーパス CHJ』を利用した。それ以外の作品は次の索引を利用した。宇津保物語研究会編（1973～1982）『宇津保物語本文と索引 索引篇』笠間書院、阪倉篤義 ほか編（1974）『夜の寢覚総索引』明治書院、塚原鉄雄ほか編（1975）『狭衣物語語彙索引』笠間書院、高知大学人文学部国語史研究会編（1985～1988）『栄花物語本文と索引 自立語索引篇』武蔵野書院、池田利夫（1989）『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院
- ⑦ 原田（1977）は『宇津保物語』の「藏開 上」「嵯峨の院」「国讓 中」「内侍のかみ」などの巻で『遊仙窟』の影響が見られると指摘した（『宇津保物語研究 考説編』pp. 454-513）。「スナハチ」は『宇津保物語』のある巻に集中せず、全巻に分散しているという今回の調査結果に合わせて考えると、『宇津保物語』は語彙の面でも全体的に漢文訓読の影響を受けた可能性があると推測する。
- ⑧ ⑦に同じ、p. 478。
- ⑨ ⑦に同じ、pp. 479-482, pp. 494-502。
- ⑩ ⑦に同じ、p. 498。

33其ノ時ニ、御邪氣顯レテ、御心地宜ク成セ給ヒヌ。然レバ、即チ、僧綱ニ可被成
キ定メ有リト云ヘドモ、持經者固ク辞シテ逃ルガ如クシテ罷出ニケリ。

(地) (今昔・卷一二ノ35)

34『……汝ガ妻ノ愁ハ申セルニ依也』。然即チ妻ヲ召タリ。

(地) (今昔・卷二十ノ20)

この7例は卷二〇以前に偏って用いられるが、例29～34の出典に該当する箇所が見出せず、例28の出典に該当する箇所はあるが、「然」が用いられていない。これらの例に「スナハチ」が原因・理由を表す接続詞「然」の直後に積極的に用いられるのは仏典の「然即」の用法を継承していると考えられる。¹³⁾

以上のように、和漢混交文における「即」の用法を分析した。漢籍の会話文にしか現れない即時発生¹⁴⁾の用法は『今昔』に見られた。漢文にも多用される継起発生¹⁵⁾の用法は『今昔』でも最も多く用いられている。仏典に用いられやすい原因・理由の表現を伴う原因条件の用法は『今昔』が継承し、積極的に部ごとに使用することによって、和漢混交文に定着したことが推測される。

6. おわりに

以上のように、本稿では、時間副詞「スナハチ」の前件と後件との意味関係によって、その用法を即時発生¹⁶⁾の用法、継起関係の用法、原因条件の用法に分け、漢文の「即」と比較しながら、和文体と和漢混交文における各用法の受容実態を考察した。

漢文の「即」も即時発生¹⁷⁾の用法、継起関係の用法、原因条件の用法を持っている。そのうち、継起関係の用法は漢籍、仏典のいずれでも多用されるが、即時発生¹⁸⁾の用法は漢籍の会話文のみに使われ、原因・理由の表現を伴う原因条件の用法は特に仏典に用いられやすい。

時間副詞「スナハチ」は漢文から即時発生¹⁹⁾の用法、継起関係の用法、原因条件の用法という「即」の三用法をすべて継承した。この三用法のうち、和文体や和漢混交文のいずれでも最も多く用いられるのは継起関係の用法である。

一方、和文体では、即時発生²⁰⁾の用法は原因条件の用法より多く用いられるが、類型的な文脈に用いられる限定がある。それに対して、原因条件の用法は中古和文で男性作者と想定される作品、あるいは男性の口調で女性作者と想定される作品に用いられている。また、即時発生²¹⁾の用法、継起関係の用法、原因条件の用法の三用法のいずれにも「スナハチ」が動詞「参る」とともに用いられる例があるため、変体漢文の影響も受けたことが推測される。

あると言える。

○即時発生の用法

即時発生の用法の「スナハチ」の下にくる動詞は「癒ヌ」(完了)、「死ヌラム」(推量)、「沈ミナム」(推量)、「供養シ奉ラム」(意志)、「教ヘ給ヘ」(命令)であり、わずか5例であるが、中古和文との相違点が見られる。

24)……ト思ヒ居タル間ニ、「即チ癒ヌ」ト聞テ恠ビ思フ事ト无限シ。

(会) (今昔・巻四ノ32)

25)「……設ヒ船ニ乗ル事ヲ得タリト云フベシ、船即チ沈ミナム」ト云フ。

(会) (今昔・巻七ノ5)

○継起関係の用法

継起関係の用法の「スナハチ」の上接語のうち、用例数の高いものとして、接続助詞「テ」122例、「ニ」16例、「バ」10例、「ホドニ」7例、名詞67例(主語)が挙げられる。

26)其ノ時ニ、提婆達多、我が手ノ指ノ端ニ毒ヲ塗テ佛ノ御足ヲ礼シ奉ル様ニテ毒ヲ付ムト為ルニ、毒即チ変ジテ葉ト成テ疵ズ癒給ヒヌ。(会) (今昔・巻一ノ10)

27)女ヲ召出ルニ即チ参レリ。(会) (今昔・巻三ノ33)

○原因条件の用法

「スナハチ」の前にくる原因・理由を表す表現として、「バ」15例、「ニヨリ(テ)」3例、「サラバ」3例、「シカレバ」4例ある。そのうち、注目されるのは「サラバ+スナハチ」「シカレバ+スナハチ」(計7例)のような複合的に用いられる例が見られる点である。この7例は次のように示したものである。

28)神ノ宣ハク、「速ニ可救シ。善ク彼レガ為ニ法花經ヲ書写シ可奉シ。然ラバ、即チ、罪ヲ免ル、事ヲ得テム」ト。(会) (今昔・巻七ノ19)

29)「……若シ八年講ゼバ実ニ久シ。願クハ、只八座ヲ開テ、八年ノ説トセム」。然レバ、即チ、七卷ヲ八軸ニ分テ、天ノ為ニ講ズ。(地) (今昔・巻七ノ24)

30)然レバ、即チ、其ノ被害タル者ヲ召テ、其ノ害セル時ノ月日ヲ対問ス。(地) (今昔・巻七ノ42)

31)吏ノ云ク、『君、東へ行カム事、二百歩シテ、当ニ古キ垣ノ穿チ破タルヲ見ムトス。明ナラム方ヲ見テ可向シ。然ラバ、即チ、君ガ家ニ至ナム』ト。(会) (今昔・巻九ノ34)

32)「此レ、尽恵寺ノ銅ノ佛像ヲ盗メル也」ト。然レバ、即チ、使ヲ彼ノ寺ニ遣テ、此ノ事ノ虚実ヲ問フニ、実ニ其ノ寺ノ佛被盜タリ。使、具ニ此ノ旨ヲ云フ。(地) (今昔・巻一二ノ13)

【表4】 今昔物語集における「スナハチ」

用法 卷	時間副詞									小計	接続詞				小計	総計
	即時発生			継起関係			原因条件				因果関係			その他		
	会	地	計	会	地	計	会	地	計		会	地	計			
一	0	0	0	0	7	7	1	0	1	8	0	4	4	0	4	12
二	0	0	0	2	24	26	0	1	1	27	0	8	8	1	9	36
三	0	0	0	0	13	13	0	0	0	13	0	3	3	2	5	18
四	2	0	2	0	10	10	0	0	0	12	1	6	7	3	10	22
五	0	0	0	0	9	9	0	0	0	9	0	3	3	0	3	12
六	1	0	1	1	16	17	0	0	0	18	2	11	13	5	18	36
七	2	0	2	1	16	17	1	2	3	22	2	6	8	1	9	31
九	0	0	0	10	20	30	1	0	1	31	2	3	5	6	11	42
一〇	0	0	0	1	8	9	0	1	1	10	0	4	4	1	5	15
小計 (%)	5	0	5	15	123	138	3	4	7	150	7	48	55	19	74	224
	3.3		-		92.0			4.7		-		74.3		-	-	-
一一	0	0	0	1	6	7	0	1	1	8	0	13	13	1	14	22
一二	0	0	0	0	12	12	1	3	4	16	0	4	4	0	4	20
一三	0	0	0	0	7	7	0	1	1	8	1	2	3	2	5	13
一四	0	0	0	0	7	7	0	1	1	8	1	4	5	3	8	16
一五	0	0	0	1	7	8	1	0	1	9	1	0	1	0	1	10
一六	0	0	0	0	4	4	0	1	1	5	0	10	10	0	10	15
一七	0	0	0	2	13	15	0	0	0	15	3	8	11	0	11	26
一九	0	0	0	1	2	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3
二〇	0	0	0	3	10	13	0	1	1	14	0	4	4	1	5	19
小計 (%)	0	0	0	8	68	76	2	8	10	86	6	45	51	7	58	144
	0.00		-		88.4			11.6		-		87.9		-	-	-
二二	0	0	0	0	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
二三	0	0	0	0	3	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3
二四	0	0	0	1	4	5	0	1	1	6	0	3	3	0	3	9
二五	0	0	0	0	4	4	0	3	3	7	0	8	8	0	8	15
二六	0	0	0	0	1	1	0	1	1	2	0	0	0	0	0	2
二七	0	0	0	0	4	4	0	2	2	6	0	1	1	0	1	7
二八	0	0	0	0	4	4	0	0	0	4	0	1	1	0	1	5
二九	0	0	0	1	2	3	0	1	1	4	0	1	1	1	2	6
三〇	0	0	0	1	4	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	5
三一	0	0	0	0	3	3	0	0	0	3	0	1	1	0	1	4
小計 (%)	0	0	0	3	31	34	0	8	8	42	0	15	15	1	16	58
	0.00		-		81.0			19.0		-		93.8		-	-	-
総計 (%)	5	0	5	26	222	248	5	20	25	278	13	108	121	27	148	426
	1.8				89.6			8.6		65.3		81.8			34.7	-

「即」から時間副詞「スナハチ」へ

八九

る限定も見られる。

5. 『今昔物語集』における時間副詞「スナハチ」

続いて、『今昔物語集』の「スナハチ」の用法と仏典における「即」の用法との関係を中心に考察する。大系本『今昔』の「スナハチ」は計441例見られ、名詞は15例、副詞は278例、接続詞は148例ある¹²。「スナハチ」の表記として、「乃」では1例、「則」では1例、「即」では439例が見られる。

ここでは、『今昔』の時間副詞「スナハチ」の前件と後件との関係によって、その用法を原因条件、継起関係の用法、原因条件の用法に分類し、各用法の巻ごとの用例数は【表4】に示した。なお、「スナハチ」という副詞全体の変遷状況を見るために、因果関係を表す接続詞「スナハチ」の用例も表に入れた。

【表4】に示したように、『今昔』では、副詞「スナハチ」総278例のうち、会話文は計36例、地の文は計242例ある。「スナハチ」は地の文を中心に広く用いられていることが分かる。「スナハチ」の部ごとの用例数に注目すると、天竺震旦部に計150例、本朝仏法部に計86例、本朝世俗部に計42例見られ、全巻にわたって用いられている。「スナハチ」は和漢混交文の用語として定着していることが窺える。

「スナハチ」の三用法のうち、漢文や中古和文に多く用いられる継起関係の用法は、『今昔』では最も多く見られ、計248例あり、副詞総用例数の89.6%を占める。部ごとの用例数は、天竺震旦部に138例、本朝仏法部に76例、本朝世俗部に34例見られる。部ごとの用例数が副詞総用例数に占める比率について、天竺震旦部は92.0%、本朝仏法部は88.4%、本朝世俗部は81.0%であり、全巻に平均的に分布している。このように、継起関係の用法の「スナハチ」は和漢混交文に定着したことが窺える。

原因条件の用法はそれに次ぎ、計25例見られ、副詞総用例数の8.6%を占める。部ごとの用例数は、天竺震旦部に7例、本朝仏法部に10例、本朝世俗部に8例見られる。部ごとの副詞総用例数に占める比率はそれぞれ4.7%、11.6%、19.0%であり、継起関係の用法と同じで、全巻に平均的に分布している。中古和文にわずかに用いられる原因条件の用法の「スナハチ」は、継起関係の用法の「スナハチ」と同じく、和漢混交文に定着したことが推測される。

即時発生の用法の「スナハチ」は5例しかなく、副詞総用例数の1.8%にとどまる。天竺震旦部のみに用いられる。古代中国語「即」の即時発生の用法は漢籍に用例が見られるが、仏典に見出されなかったという前述の調査結果を照らすと、従来仏典を踏まえて仏教説話を作ったとされる『今昔』の文体は漢籍の用法の影響も受けている可能性が

召してたべ」と申させたまへれば、やがてすなはち参りたれば、やがて御枕がみ
近く召して祈らさせたまふ。(地) (讃岐典侍日記・上)

- 20 (法師の訪問場面) 増誉僧正, 頼基律師, 増賢律師など召しにやりつつ, 頼基律師, すなはち参りて, 経読み仏くどきまゐらせらるるほどに, しばしばかりありて…… (地) (讃岐典侍日記・上)

○原因条件の用法

中古和文では, 「原因条件」の用法で用いられる例は次の三例しかない。「スナハチ」の前件と後件との間に時間の面で継起関係が見られ, 論理の面で因果関係も見られる。この3例のうち, 会話文は1例のみ, 会話主体は男性の三宮であり, 地の文は2例である。形式上, この3例の「スナハチ」はすべて原因を表す接続助詞「ハ」を受けている。

- 21 「かくはるかにさぶらふよし, 歌つかまつれ」とおほせられければ, すなはちよみたてまつりける。(地) (大和物語・百四十五)

- 22 (三宮) 当代位につかせたまひしかば, すなはち東宮にもまゐるべかりしを, しかるべきにやありけむ, とかくさはりて, この年頃, 内の納殿にさぶらひつるぞかし。(会) (大鏡・下巻)

- 23 殿の宣旨など添ひたてまつりて, 阿波前司頼成が妻の, 今の太武の女なる, それかねて仰せ事ありしかば, すなはち参りにし, 御乳母にてさぶらふ。(地) (栄花物語・卷二六)

前述したように『大和物語』『大鏡』の作者は男性と想定され, 『栄花物語』は場合によっては男性の口調で語られる可能性があるため, 中古和文の原因条件の「スナハチ」はわずか3例であり, 文脈上いずれも仏教と関係しないが, 原因・理由の表現の直後に用いたものだろう。

以上のように, 中古和文に見られる「スナハチ」の用法を分析した。漢籍の会話文のみ用いられる即時発生の用法は中古和文に見られた。漢籍と仏典とに最も多く用いられる継起関係の用法は中古和文も一番多く使用されるのである。仏典に用いられやすい原因・理由を伴う原因条件の用法は中古和文で男性作者と想定される作品, あるいは男性の口調で女性作者と想定される作品に用いられている。その一方, 中古和文の「スナハチ」の用法には独自の特徴も持っている。即時発生の用法の例(15), 継起関係の用法の例(19)(20), 原因条件の例(22)(23)では, 「スナハチ」はすべて動詞「参る」とともに使用されることから, 中古和文の「スナハチ」の三用法に変体漢文の影響が見られると考えられる。このほかでは, 即時発生の用法の「スナハチ」には漢文に見出されなかった「すぐにあることをしようと思ったが, けっきょくやらなかった」という典型的な文脈に用いられ

例14例のうち、例(16)を除き、残りの13例では会話文を導く動詞はすべて「ヲ」「ド」「ニ」という逆接を表す接続助詞を後接している。このように、中古和文の即時発生の用法の「スナハチ」は、会話時点を基準にある動作をすぐに行うのを表す点では、漢文の即時発生の用法と同じであるが、「すぐにあることをしようと思ったが、けっきょくやらなかった」という類型的な文脈に用いられる限定がある。

○継起関係の用法

継起関係の用法の「スナハチ」は計38例であり、その上接語として、接続助詞21例（「テ」14例、「バ」5例、「ヲ」1例、「トテ」1例）、名詞7例（主語5例、目的語2例）、格助詞4例（「ハ」3例、「ニ」1例）、接続詞3例（「サテ」1例、「カクテ」2例）、副詞1例（「ヤガテ」1例）、助動詞1例（「ヨウニ」1例）、連語1例（「ママニ」1例）が見られる。

総用例38例のなか、6例は会話文、32例は地の文である。会話の主体について、女性会話者は計4例、『宇津保物語』に集中的に現れ（あて宮2例、女一宮1例、藤壺1例）、男性会話者は計2人、『落窪物語』にのみ現れる（留守する男1例、右大臣1例）。

地の文のうち、女性作者と想定される作品に用いられる「スナハチ」は計13例であり、その内訳として『蜻蛉日記』では4例、『栄花物語』では3例、『枕草子』では3例、『讃岐典侍日記』では3例見られる。継起関係の用法の「スナハチ」は女性作者と想定される作品の会話文に用いられる場合、前述したように、例外とみなすことができるが、地の文に用いられる理由は何だろう。『蜻蛉日記』の日付表現は従来、漢文学の影響を受けており、『栄花物語』正篇は編年体で、その執筆にあたって、多くの史料を利用したと言われて^①いる。そのため、この両作品に見られる「スナハチ」は男性の口調で使われた可能性がある^②と推測する。例(17)(18)のように『枕草子』の3例とも仏教と関わる場面である。『讃岐典侍日記』の3例のうち、例(19)(20)の2例は仏教と関係する場面であり、残りの1例は例外と考えられる。このように、女性作者と想定される作品であるが、その内容によっては、「スナハチ」を取り入れたのではないか。

(17) (法師のくせの強い筆跡で書かれるとされる和歌への藤大納言の返歌) この返しをしてさし置かせたれば、すなはちまた返ししておこせたまへり。

(地) (枕草子・第一三二段)

(18) (読経の場面) ……よろこびながら加持せさするに、このごろ物の怪にあづかりて困じにけるにや、るるままにすなはちねぶり声なる、いとにくし。

(地) (枕草子・第二五一二六段)

(19) (行尊の訪問場面) 「院に申せ。一年の心地にも、『さも』とおほせられし行尊、

『宇津保物語』のあて宮の人物設定は『遊仙窟』の崔十娘から啓発を受けたという原田(1977)の指摘に基づき、あて宮の会話用語も『遊仙窟』の影響を受けた可能性があると考えられる^⑧。また、原田(1977)は『宇津保物語』の「琴」という素材の運用は『遊仙窟』の影響を受けたことを指摘している^⑨。琵琶を弾く女一宮と箏の琴を弾くあて宮とは一つの家で同じ部屋で育ったということを含わせて、女一宮の会話用語はあて宮に影響され、漢文的な要素が挟まれることが想像できる^⑩。このように、あて宮、女一宮の人物設定の特殊性を考えると、女性会話主体の5例会話文は例外とすることができる。この5例を除き、残りの16例はすべて男性会話者である。

次に、例を挙げながら、中古和文における時間副詞「スナハチ」の用法を分析する。

○即時発生の用法

中古和文で、即時発生の用法の14例「スナハチ」はすべて会話文(心話文、手紙文を含む)にあり、会話時点を基準に、すぐにある動作をするのを表す。この14例のうち、1例は女性会話者(『宇津保物語』女一宮1例)、13例は男性会話者である(『宇津保物語』実忠4例、民部卿1例、仲忠2例、忠保1例、正頼1例、兼雅1例、仁寿殿1例。『蜻蛉日記』道綱1例。『落窪物語』中納言1例)。また、中古和文の「スナハチ」は手紙や心中詞のような場面において、相手に対する返答や返歌、または依頼に対する訪問をすぐに行うという意味で多く用いられるという前述の山崎(2007)の指摘に基づき、即時発生の用法の「スナハチ」の後接する文脈はすべて返事する、あるいは、参るということを確認できた。これらの例のなか、注目されるのは、省略されず「スナハチ」の下にくる動詞「参らむ」の使用である。東京大学歴史資料編纂所データベースでの調査結果として、『小右記』等の変体漢文で「即参」の用例数は697例である。このように、即時発生の用法の「スナハチ」は変体漢文の影響を受けた可能性がある。

(14) (道綱) 大夫……「すなはち聞こえさすべく思うたまへしを、いかなるにかあらむ、まうでがたくのみ思ひてはべめるたよりになむ……

(会) (蜻蛉日記・中巻)

(15) (中納言) 御返りには、「昨日は、しかものしはべりしかば、すなはち参らむとせしを、日暮れてなむ。ただ今参らむ」と聞こえたまへり。

(会) (落窪物語・巻三)

(16) (実忠) 「奥山に賜はせたりしは、すなはちこそ聞こえさせむと思ひたまへたりしか……

(会) (宇津保物語・藤原の君)

例(14)(15)(16)の会話主体はそれぞれ道綱、中納言、実忠である。即時発生の用法の「スナハチ」は男性の日常生活用語として使われている可能性がある。即時発生の用法総用

【表3】 中古和文における「スナハチ」

用法		作品	竹取物語	伊勢物語	土佐日記	大和物語	平中物語	蜻蛉日記	宇津保物語	落窪物語	枕草子	和泉式部日記	源氏物語	紫式部日記	浜松中納言	更級日記	夜の寝覚	狭衣物語	讃岐典侍日記	栄花物語	大鏡	小計 (比率%)		
			会	地	計	会	地	計	会	地	計	会	地	計	会	地	計	会	地	計	会		地	計
副詞	即時発生	会	0	0	0	0	0	1	12	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	
		地	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		計	0	0	0	0	0	1	12	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14(25.4)	
	継起関係	会	0	0	0	0	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
		地	1	0	0	3	0	4	13	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	32	
		計	1	0	0	3	0	4	17	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	38(69.1)	
	原因条件	会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
		地	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
		計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3(5.4)
	小計		1	0	0	4	0	5	29	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	2	55(78.5)	
	接続詞	因果関係	会	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
			地	0	0	0	0	0	1	6	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10
計			0	0	0	0	0	1	8	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	12(80.0)	
他		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3(20.0)		
小計		0	0	0	0	0	1	8	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	3	0	0	15(21.5)		

「即」から時間副詞「スナハチ」へ

「スナハチ」の用例は漢文の影響のある作品に見られやすい。個別作品に注目すると、漢文の影響を受けたとされる『宇津保物語』において、副詞「スナハチ」は29例見られ、中古和文全体用例数55例の半分を超えている^⑦。『宇津保物語』以外の作品では、「スナハチ」の用例数は比較的になく、計26例見られる。その内訳として、『竹取物語』では1例、『大和物語』では4例、『蜻蛉日記』では5例、『落窪物語』では4例、『枕草子』では3例、『讃岐典侍日記』では3例、『栄花物語』では4例、『大鏡』では2例である。これらの作品の作者について、『枕草子』『讃岐典侍日記』『蜻蛉日記』『栄花物語』は女性と想定され、それ以外の作品は男性と想定されている。「スナハチ」の用例数を作者の性別によって統計すると、女性作者とされる作品に計15例見られ、男性作者とされる作品に40例見られる。女性作者と想定される作品になぜ「スナハチ」の用例が見られるかについて、「スナハチ」の各用法の用例分析に、詳しく考察する。

会話文の会話主体に注目すると、総用例21例のうち、5例は女性会話者であり、『宇津保物語』に集中的に現れる（女一宮2例、あて宮2例、藤壺（あて宮の別称）1例）。

(56/199) であるが、漢籍は7.6% (20/260) にとどまる。このような傾向は、文頭にあり、因果関係を表し、接続詞に用いられる日本語「スナハチ」の発生と関わるのかについて別途で検討する必要がある。

以上、漢文における「即」の三用法を分析した。継起関係の用法は漢籍、仏典いづれも多用されるが、即時発生の用法は漢籍の会話文のみに使われ、原因・理由の表現を伴う原因条件の用法は仏典に用いられやすいことが明らかになった。

4. 中古和文における時間副詞「スナハチ」

次に漢文における「即」の用法の影響が中古和文に見られるかを検証する。『萬葉集』では、「スナハチ」と訓まれるものは見られない。しかし、漢字「即」は『古事記』に126例見られることから、漢文の文体で奈良時代から定着した可能性が高い。平安時代以降では、観智院本『類聚名義抄』の「スナハチ」の項目に漢字「即」の表記が確認できる。また、築島編 (2007) 『訓点語彙集成』を参照すると、「スナハチ」と訓まれる「即」の例は夥しい量が見られる。二回加点された平安初期の『観弥勒菩薩上生兜率天経賛』に注目すると、第一次点の9例と比べて、第二次点の「スナハチ」と訓まれる「即」の用例数は多くなり、21例に上る。また、平安後期の加点資料に注目すると、『法華文句卷第二』の用例数は103例もある。訓点資料の「スナハチ」と訓まれる「即」の用例数から、平安時代に「スナハチ」は「即」の訓みとして定着したと言える。このように、漢文訓読的な「スナハチ」が平安和文に用いられる場合、作品及び会話文の主体による偏りが見られるかを確認する必要がある。偏りが確認できる場合、そこに漢文の「即」の影響があるのかを更に考察する必要がある。

ここでは、「スナハチ」の前件と後件との関係によって、その用例を即時発生の用法、継起関係の用法、原因条件の用法に分類し、各用法の用例数を【表3】に示した^⑥。なお、本稿では、「スナハチ」という副詞全体の変遷状況を見るために、因果関係を表す接続詞「スナハチ」の用例も表に入れた。

【表3】から、時間副詞「スナハチ」は合計55例見られ、会話文の21例 (14+6+1) より、地の文に比較的に多く、計34例 (0+32+2) 見られる。各用法のなかで、継起関係の用法が最も多く用いられ、計38例見られ、全体の69.1%を占める。即時発生の用法はそれに次ぎ、計14例見られ、全体の25.4%を占める。原因条件の用法は比較的に少なく、計3例しかなく、全体の5.4%にとどまる。継起関係の用法が最も多く用いられる点は漢文と同じ傾向にある。即時発生の用法は原因条件の用法より多く用いられる点で漢文との相違点が見られる。

【表2】 漢籍における時間副詞「即」

作品 用法	経書		小説			歴史書	計	
	礼記	左伝	説苑	遊仙窟	淮南子	史記		
即時発生	1	2	0	4	0	6	13	
継起関係	1	2	12	14	0	153	182	
原因条件	文頭	0	0	4	0	0	16	20
	文中	0	0	1	0	0	44(1)	45
	小計	0	0	5	0	0	60	65
計	2	4	17	18	0	219	260	

聚謀反耳。 (史記・留侯世家第二十五)

例(9)の「即」は即時発生の用法で使われている。会話時点を基準に、「圜」という動作はすぐに行うかを趙の使者の蘇代が秦の宰相の相応侯に聞くものである。

例(10)(11)は仏典にも見られた継起関係の用法である。例(10)の前件動作「聞」と後件動作「恚」との間、例(11)の前件動作「招」と後件動作「反」との間はすべて継起関係のみ見られる。

例(12)(13)の「即」は原因条件の用法で用いられている。例(12)では、前件の「蒙恬が死を肯じなかった」ことは、後件の「獄吏に引き渡して陽周に監禁した」原因である。例(13)では、前件の「地を封じられず、平生の過失で誅罰されるのを恐れる」ことによって、後件の「すぐに集まって謀反をはかろうとした」という結果を招いた。

ここでは、「即」の即時発生の用法、継起関係の用法、原因条件の三用法から、仏典と漢籍との特徴を比較してみる。継起関係の用法は仏典、漢籍いずれも最も多く用いられていることから両者の共通点が見られる。漢籍の中、特に小説、歴史書は主に時間軸に沿って語られているため、「即」の即時発生の用法、継起関係の用法が多用されるのであろう。それに対して、仏典は論理を必要とする教義や教理が主で、論理関係のある二つの事柄は時間上継起関係が多いため、「即」の継起関係の用法が多く使用されると推測できる。また、即時発生の用法、原因条件の用法に両者の相違点が見られ、前者は漢籍の会話文にしか現れず、後者の原因・理由の表現を受けることと、文頭に用いられやすいことが、仏典に特徴的に見られた。仏典では、原因・理由の表現を受ける「即」の出現率は16.5% (13/79) で、「然即」「故即」「因即」の形で現れる。それに対して、漢籍での出現率はわずか1.5% (1/65) である。これは、漢籍と比べて、仏典の論理性が強く、「即」の原因条件の用法はより用いられやすいためと考えられる。文頭に置かれる原因条件の用法の「即」の用例数が総用例数に占める比率について、仏典は28.1%

あるものは13例である。前者の用例数は筆者の文脈に対する解釈で数えたもので、後者の原因・理由を表す表現の内訳は、『妙法蓮華経』では「故」1例、『冥報記』では「然」1例、『大唐西域記』では「因」11例である。

(6)以_レ人火_レ投_レ之_レ水_レ即_レ焰起。(大唐西域記・卷第七)

(7)転復精進、以_レ見_レ我故、即_レ得_レ三昧及陀羅尼。(妙法蓮華経・普賢菩薩勸発品)

(8)池龍少女遊_レ覧_レ水濱。忽見_レ積種_レ恐_レ不_レ得_レ当也。變爲_レ人形。即而摩拊。積種驚寤。因_レ即_レ謝曰……(大唐西域記・卷第三)

例(6)の「即」の前に原因・理由を表す表現がないが、文脈上前件の「人が(池に)火を投げた」は、後件の「その場で炎が起こった」の原因と思われる。例(7)では、「故」は名詞で、「以……故」全体で原因・理由を表し、「即」の前件の「……私を見た故に」は、後件の「三昧及び陀羅尼を得た」の原因となる^④。例(8)では、「因即」は原因・理由を表す接続詞で、「龍王の娘は、自分の正体が積種(仏門の弟子を指す)に見られるのはよくないとし、人間に变じ、寝ている積種を撫でた。積種が驚いて起きた」という文脈を受け、「積種はすぐにその場で感謝した」結果を引き起こしたものである。

3.2. 漢籍における時間副詞「即」の用法

次に、漢籍の中から経書『礼記』『左伝』、小説『説苑』『遊仙窟』『淮南子』、歴史書『史記』を資料に取り上げて、時間副詞「即」の用法を調査した^⑤。その調査結果は【表2】に示した通り。なお、括弧内の数字は【表1】と同じく、「即」の前に原因・理由を表す表現がある場合の用例数を示すものである。

漢籍では、「即」の用例は合計260例ある。各用法のなか、継起関係の用法の「即」は計182例あり、最も多く用いられる。仏典と同じ傾向が見られる。原因条件の用法の「即」は計65例ある。そのうち、原因・理由の表現のある例は1例しかない。仏典に見られなかった即時発生の用法の「即」は会話文を中心に用いられ、計13例ある。

○即時発生の用法

(9)又曰、即_レ困_レ邯鄲_レ乎。(史記・白起王翦列伝第十三)

○継起関係の用法

(10)魏其良久乃聞。聞_レ即_レ恚、病_レ痲、不_レ食_レ欲_レ死。(史記・魏其武安侯列第四十七)

(11)及_レ魏招_レ之、即_レ反_レ爲_レ魏守_レ豊。(史記・高祖本紀第八)

○原因条件の用法

(12)蒙恬不_レ肯_レ死、使者即_レ以_レ属_レ吏、繫_レ於_レ陽周。(史記・李斯列伝第二十七)

(13)留侯曰、……此属_レ畏_レ陛下不_レ能_レ尽_レ封、恐_レ又_レ見_レ疑_レ平生過失_レ及_レ上_レ誅、故_レ即_レ相

ハチ」の用法を調査する前に、それと深く関わる漢文における時間副詞「即」の用法を明らかにする必要がある。そこで、本稿では『今昔物語集』（以下、『今昔』とする）の「スナハチ」に関する山口（1998）、山崎（2003）の研究をもとに、漢文の「即」の用法を分類した。山口（1998）は『今昔』の「スナハチ」の上接語を分析し、「スナハチ」で接続する前件と後件とは連続で発生する、あるいは、何かの因果関係を持つことを明らかにした。山崎（2003）は、前述したように、『今昔』に見られる、命令文に用いられる「スナハチ」の例は漢文訓読の影響を受けたことを指摘した。これをふまえ、本稿では、時間副詞「スナハチ」と同じく、漢文の「即」の用法を即時発生の用法、継起関係の用法、原因条件の用法に分類する。次に仏典、漢籍に分け、「即」の用法を見ていくことにする。

3.1. 仏典における時間副詞「即」の用法

まず、日本で漢訳仏典の代表の一つとして知られている『妙法蓮華経』、『今昔』の典拠に挙げられる『冥報記』『大唐西域記』を取り上げ、「即」の用法を調査した^②。各用法の用例数は作品ごとに整理し、【表1】を得た。なお、括弧内の数字は「即」の前に原因・理由を表す表現がある場合の用例数を示す^③。

○継起関係の用法

仏典では、継起関係の用法の「即」が最も多く用いられ、計120例見られる。

(4)棘中見_レ之、欲_レ就挽取_レ、即驚走遠去。(冥報記・巻下)

(5)如來是時說法誨諭。聞而感悟遂即出家。(大唐西域記・巻第十)

例(4)の前件の「棘の中で兄たちは行方不明になった妹を見つけ、(妹を棘の中から)引っ張ろうとして」と後件の「(妹が)驚き、遠くまで逃げた」とに、例(5)の前件の「(説法)を聞いて、悟って」と後件の「出家した」とに継起関係のみ見られる。

○原因条件の用法

原因条件の用法の「即」は計79例見られ、時間の面で継起関係の用法と同じで、前件と後件とに継起関係が見られるが、論理の面で前件が後件の原因にもなる。そのうち、例(6)のように「即」の前に原因・理由を表す表現がないものは66例、例(7)(8)のように「即」の前に原因・理由を表す表現が

【表1】 仏典における時間副詞「即」

用法		作品	妙法蓮華経	冥報記	大唐西域記	計
即時発生			0	0	0	0
継起関係			46	32	42	120
原因条件	文頭		36	8	12	56
	文中		10(1)	2(1)	11(11)	23
	小計		46	10	23	79
計			92	42	65	199

り、その訓読語である「スナハチ」は「即」の用法をどのように受け継ぎ、また、どのように受容させたかを考える必要がある。本稿では、漢文における「即」の用法を前件と後件との関係によって整理し、それを受け継いだ「スナハチ」は和文や和漢混交文でどのように用いられたかを明かにすることを目的とする。

2. 用法の分類

本稿では、時間量の短さを表す「スナハチ」を時間副詞とする^①。時間副詞「スナハチ」の用法は用いられる文脈によって、例(1)のように、ある動作をすぐに行うことを表す用法（即時発生の用法）、例(2)のように、前件動作が起こってから、後件動作が起こることを表す用法（継起関係の用法）、例(3)のように、一つの動作が起こったため、すぐにもう一つの動作が起こることを表す用法（原因条件の用法）に分ける。

○即時発生の用法

(1) (衛門督)「昨日は、しかものしはべりしかば、すなはち参らむ」とせしを、日暮れてなむ。ただ今参らむ」と聞こえたまへり。 (会) (落窪物語・卷三)

○継起関係の用法

(2)……手を後へまはして、すくみ、即ち死にけり。 (地) (沙石集・卷第一ノ十)

○原因条件の用法

(3)「かくはるかにさぶらふよし、歌つかまつれ」とおほせられければ、すなはちよみてまつりける。 (地) (大和物語・百四十五)

この三用法の「スナハチ」は、すべて時間量の短さを表し、後接する述語を限定する機能を有している。即時発生の用法の「スナハチ」は、例(1)のように会話文（心話文、手紙文を含む）に用いられ、会話時点を基準にすぐある動作（参らむ）を行うことを表すものである。継起関係の用法の「スナハチ」は、例(2)のように前件動作「すくみ」と、後件動作「死に」の間に因果関係を伴わず、継起関係のみ見られるものである。それに対し、原因条件の用法の「スナハチ」は、継起関係の用法の延長にあり、例(3)のように前件動詞「おほせられ」と後件動詞「よみ」の間に、時間の面で継起関係が見られるとともに、論理の面で因果関係が存するものである。

3. 漢文における時間副詞「即」

山田（1930）によれば、「スナハチ」は本来ある「時」を表す名詞であるが、訓読においては、まず、即時の意を表す漢字「即」の訓に用いられて、その後、ほかの意味を表す「即」、さらに、「則」「乃」などにも広がったという。古代日本語における「スナ

「即」から時間副詞「スナハチ」へ
——和文体と和漢混交文での受容を中心に——

胡 鴻 洋

1. はじめに

古代語の語彙・文体の研究において、築島（1965）が、漢文訓読文と和文とで同じ意味を表す場合に、互いに異なった語を用いるという現象を指摘したことは、以降の研究に大きな影響を与えた。築島（1965）は接続詞・副詞などは、和文と訓読語の間に語彙の出入が最も甚だしい品詞で、これらの品詞から、訓読語の特徴は特に顕著に見出すことができると指摘している。とりわけ、副詞は訓読語と和語の対応例の典型を見つけやすいと言えよう。

訓読に多く用いられる副詞「スナハチ」は、上代、名詞用法で用いられたが、漢文訓読の影響で、漢字「即」「乃」「則」等の訓に用いられ、副詞用法、接続詞用法で使われるようになったことが山田孝雄（1930）によって指摘されている。山田（1930）の論以降、漢文訓読の影響を踏まえる「スナハチ」の研究が見られるようになった。例えば、山崎（2007）は、古代中国語「即」の時間的な用法として基準時から時間量の小を表すものと、後の一つの動作、状況が前の動作、状況の発生や出現に緊接していることを表すものがあると述べ、中古和文では、副詞「スナハチ」は手紙や心中詞のような場面において、相手に対する返答や返歌、または依頼に対する訪問をすぐに行うという意味で多く用いられるとされる。それに対して、和漢混交文では、「君、即チ、其ノ髪置キ給ケム所ヲ教へ給へ」（今昔・巻七ノ26）のように、漢文訓読の影響を受けたとされる命令文が見られると説かれた。

山崎（2007）は「スナハチ」の用いられる場面に焦点を当て、和文体と和漢混交文との相違を明らかにしたが、「スナハチ」の各用法の和文体や和漢混交文における受容実態の考察はまだ十分ではない。「スナハチ」の用法をより詳しく分析するには、「スナハチ」は「前後にあらはるる事項に対比しての程度分量状態をあらはすもの」と山田（1954）の指摘したように、「スナハチ」の意義をその前後の表現内容との関わりから研究する必要があると考えられる。そのために、古代中国語「即」はどのようなものであ